

* * * *

ハギ属ヤマハギ節では、2 種以上からなる集団で、中間形とみられる個体があり、一部は種間雑種と推定される。本論文ではキハギとマルバハギの中間形で両種の雑種と推定されるものについて検討した。この形はすでに一部の研究者に注目されていたことが標本ラベルの書き込みなどから判る、東京都五日市市時坂と埼玉県飯能市伊豆ヶ岳の集団で野外調査を行なった。中間形の個体では変形した花粉がキハギやマルバハギなどの場合と較べて多く、稔性は 10.4~75.5% と低かった。 *Lespedeza* × *cyрто-Buergeri* (オクタマハギ, 新称) の名を与えた。キハギとマルバハギが同所的に分布する各地に個体数は少ないものの広く存在するものと考えられる。

□大場達之・平野隆之：フィールド百花、野の花 1 155 pp. 1982. 山と溪谷社，東京。¥1,700. 野の花と山の花をその生態を40に区分して全六冊に組み立てたその第一巻である。生態図鑑と唱っているだけあって本書では野の花を、畔道や路傍に咲く、雑草の花・畑、雑草の花・水田、踏まれて生きる、都市に生える、雑草の花・庭、河原を彩ると区別し、各プレートも被写体を広くとってその有様を図示したのはよい。ただたとえばツユクサやミゾカクシのようにその植物が背景の中に収まり切ってしまっはつきりしないのは少々物足りない気がする。また少し違うが、都市に生えるの集の中でオオケタデが新穂高温泉で撮られているのも少々場所が違うようで惜しい。しかし全体として新しい立場から編集されたことに意義を感じ、引きつづく編集に大いに期待するものである。第一巻に6冊の索引がのっているのも珍しい。(前川文夫)

□宇都宮貞子：植物と民俗 285+20 pp. 1982. 岩崎美術社，東京。¥2,200. 宇都宮貞子さんについては多言を要しない。その著者が日頃から注意して集めてきた信越の故老の体験を整理してまとめたもので、信仰、禁忌、縁起、諺、村の話、子供の遊び、いろいろな唄、食べもの、薬染料、衣類と付属品、農事年中行事と分類して載せてある。文章も例に依って似ていて、たとえば「白いウツギの木を一寸ばかりに切って糸を通し、首に掛けてるとはやり風邪やバヒフ(ジフテリア)にかからんというう。魔除けずらよ]という風でまことにいわれぬ味がある。単に沢山集まっているだけでなく、著者が植物に詳しいので一層親しみが湧いてくる。主に長野北半と新潟西部、それに大和の明日香地方を扱っている。終りに民俗語彙と地域語を含めた植物名の細かい語彙がのっているのもまことにありがたい。(前川文夫)